

ダビデ王の運命を変えた五人の女性たち¹

ジョナサン・マゴネット

須藤 伊知郎（訳）

サムエル記は、聖書のイスラエルが部族的な集団に基づく社会から王の下にある統一国家の創設に至る移行に焦点を当てています。それは三人の主人公に焦点を当ててこれを叙述しています。一人目はサムエルで、彼は部族的なシステムにおいて、預言者、祭司そして政治的指導者の三つの役目を果たしました。二人目は最初の王、悲劇的な人物サウルで、彼は自分の新しい役割の性質と範囲を定めようと苦闘し、他方でまた自分自身の内なる怪物に対処しなければなりません。三人目はダビデ王で、彼は君主の政治的、軍事的な務めを最も良く果たし、他方でまたこの新しい国家構造の中で祭司と預言者に独立した役割を創設しました。彼の個人的な悲劇は、王としての公的な責任と、私生活において息子たちの兄弟争いで引き起こされた家庭内のドラマの間の葛藤から生じました。しかしながら、この大きな歴史的な概観の中で匿名の語り手は、ダビデの人生の鍵となる瞬間に直接影響を与えた注目すべき女性たちを、何人か見事に紹介しています。彼女たちは読者の前に生き活きと立ち現れ、自分たちの物語もまた承認されることを要求しています。

ミカル

ダビデが大人となってからの人生に影響を与えた、年代的に最初の女性は、サウル王の娘、ミカルです。ダビデとサウルがどのように出会ったかを示す二

1 訳注：これは2024年5月6日、西南学院大学コミュニティセンターホールで行われた学術研究所主催公開講演である。原題は、“Five key women in the life of King David”。

つの物語のうちのひとつで、ダビデはサウルの理性を失った情緒不安定を宥めるために音楽を奏でよう雇われています。その物語で私たちはサウルがダビデを「愛した」(サム上 16 : 21) ことを知ります。しかし後にサウルは、ダビデが次々に軍事的成功を収めて人気が高まっていくのに腹を立て始めました。これらの成功は〔都に〕帰還してくる軍隊を歓迎しに出て来た女性たちによって歌われた歌にさえ折り込まれています。「サウルは千を討った／しかしダビデは万を討った。」(サム上 18 : 7)²ダビデを戦場で死の危険にさらすために、サウルはダビデが自分の長女メラブと危険な報酬と引き換えに結婚するよう提案しました。しかし、この話が流れた時、彼女の妹ミカルがダビデを「愛した」こと、そして彼を破滅させるために彼女を同じ罠に使うことができるかもしれないということを知って、サウルは喜びました(サム上 18 : 20)。しかしダビデを「愛している」のはミカルとサウルだけではありませんでした。というのは、ダビデがゴリアテを倒した勝利のすぐ後、私たちはサウルの息子ヨナタンもまた彼を「愛した」ことを知るのです。これはヨナタンの戦場での死に至るまで持ちこたえた、長く続く忠誠と愛情の絆となりました。ヨナタンの死を悼んで、ダビデはヨナタンの彼への愛は女性たちの愛にまさって素晴らしかった(サム下 1 : 26) と言うほどでした。これらダビデを愛した三人すべての場合に、同じヘブライ語の動詞 *'ahav* 「愛する」が使われています。それにもかかわらず、ダビデがそれに応えてその人たちを愛したという報告は、聖書にありません。

ミカルのダビデへの愛はサウルによって、この王座を目指していると見なされた仮想ライバルを振り払う手段として用いられます。彼女の手結婚の際手渡すべき「婚資」[*bride-price*] はペリシテ人の包皮百枚でしたが、ダビデはペリシテ人二百人を殺し、自分は無傷でそれらを獲得することに成功します(サム上 18 : 25-27)。これはミカルが他者の政治的な計画のために利用された最初

2 この歌はとても人気があったので、イスラエルの不倶戴天の敵、ペリシテ人にさえよく知られていた(サム上 21:12; 29:5)。〔訳注：この歌の歌詞の前半と後半を結ぶ接続詞〕を多くの英語訳は“and”と訳しているが、マゴネット師は“but”と訳している。以下、聖書の引用はマゴネット師の英訳に沿うよう試訳した。〕

の時でしたが、それが最後にはなりませんでした。結婚は成立しますが、サウルは僕たちを遣わしてダビデを殺すことを決断します。ミカルは彼に警告し、家の窓から彼をつり降ろして逃がします³。彼女はダビデが逃げおおせるチャンスを増すために、彼の不在の露見を遅らせます。自分の父を裏切ったことをサウルに咎められると、彼女はダビデが彼女にそうするよう強いたのだ、と主張します（サム上19：11-17）。ここまでのところ彼女の役割はダビデを父親に逆らって支えることでしたが、その忠実さは将来厳しく試されることになります。何章か後、付随的な脚注のように読めるところで、サウルはどういうわけかミカルのダビデとの結婚を破棄し、彼女をその代わりにライシュの子パルティという男に嫁がせます（サム上25：44）。この文章は出てきたその場所で簡単に見逃されそうなものですが、語り手はそのようなヒントを後に拾い上げられる話の筋を生かしておくために使っているのです。ミカル伝説はすでに、彼女のダビデとの関係の悲劇的な底流を先取りしているのです。

アビガイル

サウルに逃げるよう強いられて、ダビデは無法者の生活を送ります。その周りには、自分たちの土地ないし社会における地位を奪われた彼の家族のメンバーたちやその他の者たちが集まりました。やがて事実上彼の軍勢である成人男子の数は六百人に達します。彼らにはその妻たち、家族、その他扶養される者が伴っており、その者たちのためにダビデはますます大きな責任と指導者の役割を担っていきました。

この文脈で私たちはダビデの人生で重要な継続的役割を演じる第二の女性に出会います。映画であれば「スプリット・スクリーン」になる手法を用いて、語り手は読者の注意を同時に起こっている二つの出来事の間でスイッチさせ、

3 ミカルはダビデが逃げる時、窓から見ている。数年後の対照的なエピソードで、ミカルは〔結婚した〕自分たちの家の窓から見て、ダビデの振舞いを軽蔑することになる。この種のイメージは物語の中に内的な繋がりを創り出し、関係と変化を紐解く意識下の鍵〔subliminal clues〕を提供する。

私たちが主人公が最後に遭遇する衝突を予期するようにして緊張を高めます。ダビデはサウル王から身を隠す亡命生活の中で、彼のサバイバル戦略の一環として、自分の手下たちを私的な諜報機関として行動するように用いていました。彼らは地元の土地所有者たちの羊の類や牛馬の群れを外から来る略奪者たちから守り、自分たちが面倒を見ている動物が迷わないように確保していました。ダビデはこの役割を無料で行っていると主張していますが、この先に描かれるエピソードから、自分がやったことに対してある種の報酬を期待していることは明らかです。この振舞いから彼はある種の「みかじめ料の巻き上げ」を行っているという非難を受けることとなり、それが以下のエピソードで示唆されていることのように思われます（サム上 25 章）。

ナバルという金持ちの土地所有者が羊の毛を刈る季節を祭で祝うと、ダビデは若者たちの使節団を送って、非常に礼儀正しく、自分の働きのためにある種の贈り物をするように要請します。ナバルは彼らを空手で去らせませう。おそらくサウルとダビデの争いのことを知っていて、彼はダビデを「自分の主人に逆らう僕」の中に分類します。若者たちが帰って報告すると、ダビデは激怒し、自分がしてきたのはナバルの者たちを守ることだけだと主張します。彼は自分の戦士たちから四百人を選び、ナバルを攻撃して一人も生かしてはおかないと誓います。その間に〔物語の場面が〕ナバルの家に戻ると、従者の一人がナバルの妻アビガイルに起こってしまった出来事について知らせ、ダビデがおそらく行うであろうことについて警告します。アビガイルは聡明で、美しいと描写されていますが、しかし彼女は現実に対処し決断する能力があることを示してもいます。彼女はダビデとその手下たちのために食料を集め、急いでそれらを彼の許に個人的に届けに行きます⁴。私たちは二つの一団、ダビデとその戦士たち、アビガイルとその食料が、それぞれの丘の斜面を降りながら、お互いに見られることなく衝突する進路を進み、間の谷底で出会うところを思い浮かべることができます。

アビガイルがその後ダビデに語ったスピーチは、潜在的に危機的な状況を解

4 語り手は彼女の気力とエネルギーを、続く出来事の中で動詞 *'vat'maher'* 「そして彼女は急いだ」を三回使って、見事に特徴づけている（サム上 25:18, 23, 42）。

消し、その後の事態の進展を掌握する巨匠級〔masterclass〕のものです（サム上 25：23-31）。彼女はまずダビデの前にひれ伏して恭順の意を示し、直ちに起こった出来事の原因は自分にあると言い、耳をお貸しくださいと願います。彼女は自分の夫を無礼で無神経で、名前のとおり〔ナバル＝愚か〕であると強く批判し、彼女自身は決してダビデの若者たちに会ってはいないと主張します。ダビデにお世辞を言う戦略の一環として、彼女は彼に 13 回‘adoni’「ご主人様」と呼びかけます。5 回自分自身に‘amat’cha’「あなたの仕え女」、そしてまた 1 回‘shifchat’cha’「あなたの下女」と言及して、彼女自身が取るに足らないことを強調しています—二つの単語は交換可能であるように思われますが、後者はより多く潜在的な親密さの示唆を含んでいるかもしれません。7 回彼女は神の名をダビデが仕えているお方として引き合いに出し、彼が神の名において行動する際、どのような振舞いがダビデに期待されているかということを強調しています。次第に事態を掌握するようになるにつれ、彼女はその話を 3 回‘v’attah’「そして今」という語で区切ります。これは次のステップを提案する前に、ある種の合意の達成を示すために用いられるものです。最初にこの語を使うところで（26 節）、彼女はダビデが今日血を流すことを引き止めたのは神であると断言して、そうして自ら率いている戦士たちで明らかに彼がやろうとしていた〔攻撃の〕意図を武装解除させてしまいます。二度目の「そして今」で、彼女ははっきりとナバルとの縁を切り、彼がダビデの敵どもと同じ運命を被ることになるように！という希望を付け加えます。三度目の「そして今」で（27 節）、彼女は自分が持ってきた食料を提供し、それらをダビデに従っている若者たちに与えられるべき「祝福」⁵であると述べます。

最初の緊張を解いてから、彼女のスピーチの残りはダビデの将来を展望するものとなります。彼は神の戦いを戦ってきたのである、と彼女は主張し、やがてイスラエルの支配者となるであろうと示唆します。そのような役目にありますから、神がダビデの敵どものことは片付けてくださるのであって、ダビデ自身は訳もなく無実の血を流してこの重要な天命を傷つけはならないのです。こ

5 訳註：בְּרָכָה「祝福」は文脈によっては「祝福を伴う贈り物」を意味する。

これらの言葉は明らかに、ダビデがナバルへの攻撃を再開しないようにとの彼女の望みを強めるものです。しかしそれらはまた、ダビデが権力の座に上り詰めていく間の彼の行動と選択の中に反響することとなるガイドラインにもなっています。アビガイルに〔後代の〕ラビたちがその解釈において女性預言者の地位を与えたのは、ダビデの将来についての彼女の展望のこの部分なのです。アビガイルはすでに、ダビデが将来戦略的、外交的な事柄に対処する行動原則に一つの重要な寄与を為しています。

しかしながら、彼女の締め括りの言葉にはもう一つより個人的な側面があります。彼女が願う最後のことは、ダビデが成功を収めた時、彼の「仕え女」を忘れないでください、ということでした。何人かのラビたちは彼女の提案を不道德なものだと見なしています。結婚している女性がどうして将来ダビデと関係を持つだろうと^{ほの}仄めかすようなことができるでしょうか。そのような批判を補強するかもしれないヒントが聖書の記載の中に二つあります。この物語を通じて彼女の名前は最後の文字^ララメドの前に^ヨヨッドを伴ってつづられており、そこで^{אביגיל}‘Avigail’「アビガイル」という読み方になります。しかしダビデが答えるところで本文はその〔ラメドの前の〕ヨッドを落として、彼女の名前が^{אביגל}‘Avigal’「アビガル」となっており、彼女の名前にヨッドの文字が欠けていることは彼女が言ったことに対する不承認を示唆しています。もっと重要なことは、この章の終わりで、ナバルはアビガイルから起こったことを聞かされて、いささか劇的な死を遂げます。ダビデは彼女に使者を送り、再び彼女はいつものように、「急いで」⁶彼のところに行きます。彼女は彼の妻となり、彼の息子たちの一人を産む者となります。しかし、後の二つの箇所では彼女は〔ダビデの妻ではなく〕「カルメル人ナバルの妻アビガイル」と言及されています（サム下2:2;3:3）。

この章の末尾はダビデのアビガイルとの関係が発展していくのを描写していますが、最後の一節がミカルのパルティとの結婚について情報を提供しているのは、おそらく語り手の計画的な選択です（サム上25:44）。

6 訳註：上掲注4参照。

私たちは次に数年後にミカルと出会います。サウル王がギルボア山でペリシテ人との戦いで死んだ後、ダビデは彼の部族、ユダの人々から彼らの王になるように招かれます（サム下2：4）。ネルの子アブネル、サウルの軍の元司令官はサウルの子イシュ・ボシェトを擁して彼を〔ユダ以外の〕残りの諸部族の王に指名しました。内戦が二つの王国の間で勃発します。アブネルが王座の背後で実権を握っていることは明かです。イシュ・ボシェトがアブネルにサウル王の側女と通じたことを非難すると、アブネルは激怒します（サム下3：7-8）。彼はサウルに忠実な諸部族をダビデと連合させ、ダビデの支配の下に一つの王国を創設することを決断します。もう一度、私たちはこのエピソードの一見重要でない細部に注意を向けなければなりません。サウル王の側女の名前は、アヤの娘リツパで、彼女は将来もう一つ別の、非常に異なる役割を演じることになります。

アブネルはダビデに使いを送り、この二王国統一の可能性を交渉させます。しかしダビデはアブネルに、自分と会う前に誠意を示すため、サウルの娘、彼の前妻ミカルが彼の許に戻ってくるよう手配するように要求します。アブネルの同意の後、ダビデがイシュ・ボシェトに使いを送って手はずを整えると、弱い王〔イシュ・ボシェト〕は逆らうことができません：

イシュ・ボシェトは人をやって、彼女（ミカル）をその夫、ライシュの子パルティエルから取り上げた。すると彼女の夫は泣きながらミカルを追い、バフリムまで来たが、アブネルに「もう帰れ」と言われて帰って行った（サム下3：15-16）。

なぜダビデはミカルを取り戻したかったのでしょうか。そこには明白な政治的利益があります。彼女が彼の妻となることで、新たに創設されるダビデの家とサウルの家の間の一統はより強固となるでしょう。そうしてダビデは目覚ましい無血の勝利を手繰り寄せることになるでしょう。どうして語り手はこの一見周縁的で付随的な詳細をここに持ってきているのでしょうか。自分の妻を追いかけて泣いているパルティエルの姿は読者の注意を、そのように一見成功に満

ちた政治的な動きに伴うことがある人間の苦難の現実に向けさせます。パルティエルに焦点を当てることで私たちはまた、ミカルが経験してきたはずの途轍もない感情を想像することもできるでしょう。ダビデは、ちょうど彼女の父サウルがすでに以前やったように、自分自身の政治的な目的のために彼女を効果的に利用してしまったのでした。これはまだミカルの怒りと苦い思いが表現される時ではありませんが、それがついに爆発する時には、彼女はそうでなければダビデの成功と勝利の最高の瞬間となったはずのものを台無しにすることとなります。

次の数章はダビデの統一君主国の支配者としての権力が固められ、より広い領域においても主要な役割を演じるようになるところを見ることになります。彼はエルサレムを占領して自分の首都にするでしょう。彼はペリシテ人を重要な戦いで破り、それから彼の最大の夢の一つ——かつてペリシテ人に奪われた主の契約の箱をエルサレムの新しい永続的な安置場所に運ぶこと——の成就に着手するでしょう。サムエル記下6章で彼はこれに着手します。出だしのつまずきの後、ダビデは彼自身が亜麻布のエフォド〔祭儀の式服〕を身に着けて契約の箱の前で踊るという、ふさわしい宗教的儀式で自分の夢を何とか実現します⁷。契約の箱は〔イスラエルの〕民全体のための偉大な公けの祝典で歓迎されます。ダビデの勝利は完璧です。それから彼は家に戻って自分の家族を祝福しようと帰っていきます。ミカルが出てきて彼を迎えます。この章の少し前で語り手は、ミカルが行列を自分の窓から眺めているのを描いていました——文字通りにか、象徴的に、これは彼女がかつてダビデを二人の関係が劇的に始まった際、吊り下ろして無事に逃した窓〔の場面〕を繰り返しているように思われます。今度は彼女は何を見たのでしょうか。

そしてそのようにして、主の契約の箱がダビデの町に着いたとき、サウルの娘ミカルは窓から見下ろし、ダビデ王が主の前に跳ねたり踊ったりしているのを見て、心の内で蔑んだ（サム下6：16）。

7 次の章（サム下7章）でダビデは自分が主の箱を安置するための実際の神殿を建設するように運命づけられてはおらず、彼の子孫の一人がそれを行うだろうということを知るようになる。

ダビデが期待していたように歓迎する代わりに、ミカルは自分が辿ってきた心
にうずく苦い思いのすべてを解き放って、ナイフを心臓に向けるように、ダビ
デの喜びに突き刺しました。彼女は彼に次の言葉で挨拶します：

今日のイスラエルの王はなんとご立派であったことでしょう。一人の粗野
な者が恥ずかし気もなく裸になるように、家臣の仕え女たちの目の前で裸
になられたのですから！（サム下 6：20）

彼女の言葉の中に自分にふさわしいはずの尊厳と地位を守ろうとする、王女
の傷つけられたプライドを聞き取ることができます。彼女は、その想像の中
で少なくとも、民の前でそのように粗野な振舞いをする事は決してあり得な
かったサウル王の娘です。ダビデはサウルの手中にあった際の自分自身の苦い
体験をおそらくほのめかしながら、どのように神が彼を王座を継承する者にな
るよう選んだのかを勝ち誇って宣言し、答えます。

そしてダビデはミカルに言った。「あなたの父やその家のすべての者の上
にこの私を選んで、主の民イスラエルの指導者と決めてくださった主の前
なのだ。その主の前で私が陽気になっているのだ。私はこれよりもっと
威厳のない姿になろう。自分の目にさえ卑しい者となろう。だが、あなた
の言うこれらの仕え女たちからは、誉れを受けるであろう。」（サム下 6：
21-22）

ダビデが神を讃め称えて忘我の喜びのうちに踊ることとして体験したことを、
ミカルは威厳のない露出に過ぎないと一笑に付しました。ダビデにここで「イ
スラエルの王」と呼びかけることで、彼女は彼を自分にとってイスラエルの最
初のそして唯一の王であったサウルと対比させています。これらのわずかな言
葉で彼女は、ダビデの深い宗教的な献身を彼の家臣の女奴隷たちの前での粗野
な性的露出癖に過ぎないものへと貶^{おとし}めています。彼女にとってダビデは明ら
かに真の王にふさわしい威厳を欠いていました。

ダビデは彼女の非難に直接応答し、彼女から誉れを受けることはないとしても、それでも女奴隷たちからそれを受けるだろうと誇ります。この章の最後の節は、これが二人の関係の修復不能な破綻を画すものであることを確認して、それを極めて容赦無く次のように表現しています。⁸

そしてサウルの娘ミカルには、その死の日まで子どもがなかった。(サム下6:23)

バト・シェバ

この研究で次に登場するのはバト・シェバです。一見したところ彼女は束の間の人物に過ぎないように見えます。彼女の肉体的な魅力がダビデの関心を引きつけるのですが、それは彼がもはや戦場ではなく自分の家の王宮で退屈している時のことでした。彼の反応は単に自分の情欲に身を委ねることです。このエピソード全体を通じてバト・シェバは、おそらく王に対する恐れから、完全に受け身であるように思われ、自分が妊娠したとダビデに使いをやって知らせるだけです。この章(サム下11)は、バト・シェバの夫ウリヤが家に帰って自分の妻と寝て、子どもを作るのにふさわしい父親の役目を提供することを拒否する時のダビデの当惑と苛立ちを読者が楽しむことができるようにして、ダビデをネタに使うという、アイロニーの深いセンスで書かれています。ウリヤの死とともに物語は陰鬱となります。バト・シェバの子どもの死に対するダビデの反応と彼女を慰めようとする試みは、彼の個人的な宗教的献身と彼女への配慮を非常に深く描いています(サム下12:15-25)。

バト・シェバはダビデの後継者を決めるためにアドニヤの支持者とソロモンの支持者が争うところで再び登場し、もっと積極的な役割を演じることになります(王上1章)。ここでもう一度、彼女は他者の指示に受動的に従っているように見えます。しかし彼女自身の命と自分の息子ソロモンの命がかかると、

8 この発言には政治的な側面があるかもしれない。最初の二人の王たちの血統を受け継ぐ子どもがいたら、ユダ族の王位継承者にとって潜在的な脅威となるかもしれない。

彼女もまた割り当てられた台本に寄与をします。後に彼女は、アドニヤがソロモンの王としての座をしつこく求めると、介入することになります(王上2章)。今度は、アドニヤのソロモンに話をしてほしいという願いを支持している彼女のうわべのナイーブさが⁹、彼が置かれている状況への純粋な共感なのか、それとも彼の陰謀の失敗を確実にするための彼女の策略に過ぎないのか、明確ではありません。この列王記の最初の二章において、多分また同じ語り手の筆で、バト・シェバもまたダビデの経歴に彼女自身の最後の寄与を付け加えています。

それにもかかわらず、ダビデの最初の振舞いについて一つの謎が残ります。多くの妻たち、側女たちがいたのに、何が彼にこんな馬鹿げた危険な判断ミスさせたのでしょうか。私たちが語り手によって私たちに提供されている底流に続いているヒントを真剣に受け止めるなら、私たちはダビデの振舞いの〔謎を解く〕鍵を見つけられるかもしれません。何がダビデの〔誘惑に負けやすい〕もろさとバト・シェバとの情事を公衆の面前で、そのことを知っているこれほど多くの使いを行ったり来たりさせて、無頓着にやっていることを説明してくれるのでしょうか。ここに私たちは、ダビデが女性たちに自分を〔裸で〕見せたことと彼がいつでも欲する時にはそれを続けるだろうという誓いに対するミカルの感情の爆発の最終的な帰結を見ているのだ、と私は示唆したいと思います。ミカルに子がなかったことは、彼女が彼に抱いた軽蔑に加えて、彼女が彼に性的な満足を拒みもしたかのようである、というもう一つ別の側面があり得ます。実際彼の家庭生活全体は彼にとって台無しとなってしまっていたのか

9 アドニヤは、自分はソロモンより年上なので継承権は自分のものだはずっと以前から主張してきていた。最初の試みが失敗した時、彼はバト・シェバのところに来て、年老いたダビデの冷えた体を暖めるために選ばれた(王上 1:1-4) シュネム人のアビシャグと結婚する願いを支持してくれるように彼女に願った(王上 2:13-17)。先の王の側女と同棲した王位継承僭称者たちは、彼らが後継者となる立候補を公けに表明しているものと見られる可能性があった。バト・シェバはアドニヤが彼女の支持を求めていることに対して共感しているように見える一方、ソロモンはそれを見抜いてアドニヤは処刑される(王上 2:18-25)。同じテーマがアブシャロムの父に対する反乱の一部としてダビデの側女と寝るようにというアヒトフェルの彼への助言にも現れ(サム下 16:21)、そしてアブネルの、サウルの側女リツバとの密通においても同様である(サム下 3:7)。

もしれません。そのような状況で彼が女奴隷たちとやってやるぞと心に誓っていた戯れは日常茶飯事になっていたのかもしれない、バト・シェバのエピソードは単に彼が情欲を欲しいままにしたもう一つの機会だったに過ぎないのかもしれない。おそらくそれが、サウルとダビデの両者が彼女を一生を通じて利用してきたやり方に対する、ミカルの意図せざる復讐だったのでしょう。

テコアの知恵ある女性

バト・シェバのエピソードと預言者ナタンによる彼の振舞いの非難の後、ダビデの家庭生活は彼の息子たちの振舞いによって崩壊し始めました。彼の長男は、おそらくダビデの後継者となるべく仕込まれたアムノンでしたが、アムノンもまた満たされなければならない性的衝動に囚われていました。彼の憧憬の対象は異母姉妹のタマルでした。彼は彼女を騙して自分のところを訪ねさせ、結婚の手はずを整えることができるという彼女の賢い提案があったにもかかわらず、力づくで自分を押し付けました。彼女をレイプした後、テキストが鋭く記しているように、彼は以前に彼女を愛していた愛よりも激しい憎しみを彼女に覚えるようになりました（サム下13：15）。彼は召使いに命じて彼女を追い出しました。タマルは頭に灰をかぶり、上着を裂き、大声で泣きながら歩き回り、兄アブシャロムの家に身を寄せました¹⁰。語り手はダビデ王が起きた出来事を聞いて激しく怒ったと記していますが（サム下13：21）、しかし明らかにアムノンを罰するようなことは何もしてませんでした¹¹。アブシャロムは二年

10 タマルもまた、どちらかという間接的にであるが、ダビデの人生に重大な影響を与えた女性たちの列に加わる資格があるだろう。これ以上は何も彼女の運命について知られていないが、アブシャロムに、美しい女性と描写されている娘ができた時、彼は彼女をタマルと名付ける。それはおそらく自分の妹を記念してのことか、あるいは単にその妹に起こった出来事とダビデが行動し損ねたことを記憶に留めるためであろう（サム下14:27）。

11 これらの物語でダビデがその名前ダビデと呼ばれているのか、それともダビデ王として導入されているのか、注意することが重要である。前者の場合、特に家庭の問題であるとき、彼はより個人的に関わっているように思われ、後者の場合、彼は自分の王としての役割から行動している、ないし行動しようと苦闘している。

間時が熟すのを待ち、機会を設けて彼の従者たちがアムノンを殺せるようにしました。アブシャロムは、自分の母の家族の郷里、ゲシュルに逃れ、そこで自発的な亡命生活を送りました。ダビデは、私たちはそう聞かされるのですが、アムノンの死を悲しむ深い喪の期間に入りました（サム下13：37）。

時が過ぎて、ダビデはアムノンの死を受け入れるようになりましたが、アブシャロムをどうすべきか決めかねていました。王としては彼を殺人のゆえに処罰しなければなりません、父親としてはそうする気になれませんでした。結果として彼はある種の永続的なうつ状態に陥りました。国のために、ダビデを活動的な生へ目覚めさせるために何事かがなされねばならないと認識したのは、彼の軍の司令官、ヨアブでした。彼は、その知恵で名高い一人の女性をテコアの町から呼び寄せ、協力を求めました¹²。彼は彼女に王に語るべき物語を授けました。彼女は最近やもめとなり、二人の息子がいました。ある日、畑で彼らの一人がもう一人を打って、殺してしまいました。しかし今や彼女の一族が、生き残っている兄弟をこの殺人ゆえの死刑にするから引き渡せと、彼女に要求しているのです。しかしこのことは彼女の夫の名と財産を継ぐ者が誰もいなくなってしまうことを意味すると、彼女は指摘します。最初はダビデは無関心な様子で、彼女のために何かしてやるからと曖昧な約束をします。読者はここですでにこの兄弟殺しの物語が、ダビデの胸中に自分自身の似たような家庭の状況について感情を引き起こすだろうかと思うかもしれません。この女性がしつこく願うので、とうとうダビデは介入して彼女の息子を救う約束をします。

ダビデの注意を獲得して、この女性は今やヨアブから与えられた秘密の使命遂行に移ります。彼女は彼自身の息子アブシャロムを亡命から連れ戻し、将来国を指導する者として彼を復権させるように仕向けます。彼女のそれと分かる知恵、ダビデもまた行なったように、自分の話を補強するために繰り返し格言を用いること、そしておそらく彼女の魅力がダビデに働きかけます。しかし彼

12 このエピソードについてより詳しい叙述は、ジョナサン・マゴネット「ダビデ王とテコアの知恵ある女（サムエル記下 14：4-20）」日原広志訳『西南学院大学神学論集』81 巻1号、2024 年、55-67 頁を参照。

女がまた意図的に落としている手がかりから、彼は彼女の話までつち上げ、送り出したヨアブの影響の可能性を拾い上げます。彼女の話と彼への応答を通じて、彼女はダビデがそれまでの麻痺状態から抜け出し始めるように助けました。しかし彼女の知恵はダビデに影響を与えただけでなく、そのように困難な状況において彼女自身が生き抜くことを確実にするものでした。彼女は、国で二番目に最も権力のある男、ヨアブによって課された任務を達成することに取り組みながら、他方でさらに権力のある王！、ダビデの怒りを引き起こさないようにするという難問に直面していました。その知的な手腕を用いて、彼女はヨアブの役割を肯定的に露わにすることに成功します。その癒しの技術で彼女はダビデが彼の精神状態を克服し、自分の運命にもう一つの決定的な変化をもたらすエネルギーを与えています。

リツパ

私たちはすでに五人目の女性、アヤの娘、サウル王の側女、リツパに出会っています。アブネルがサウル王の死後、彼女と関係を持ったのでした。彼女は、ダビデの治世に三年続いた飢饉があったという情報で導入されるエピソードに再び現れます。それは非常に深刻でしたので、ダビデは主にその原因を尋ねました。答えは、それが起きたのはギブオン人を殺した際のサウル王家による流血のゆえである、ということでした。ヨシュアの時代の土地占領の時に、ギブオンの住人は遠い国から来た訪問者だと偽り、ヨシュアと協定を結びました（ヨシ 9：3-27）。彼らの策略が発見された時、彼らは留まることを許されましたが、木を切る者、水を運ぶ者としてイスラエル人に仕える者となりました。〔この箇所〕他にはサウル王によるギブオン人殺害への言及はなく、その〔言及をしている〕節はただ、彼がイスラエルとユダの子らへの熱心から彼らを殺そうとした、と記しているだけです（サム下 21：2）。ダビデはなぜ神が飢饉を起こしたかの説明を受け取ると、ギブオン人たちに何が行われることを望むかと尋ねました。彼らの答えは、彼がサウルの息子たちの中から七人を引き渡すように、そうすれば彼らはその者たちを主のために吊^つるしてさらす、

というものでした。ダビデは彼らを引き渡すことに同意しますが、ヨナタンと契約を結んだヨナタンの息子、メフィボシェ^トの命を惜しみました。結果として王は、リツパの二人の息子、アルモニとこれも名前がメフィボシェ^トというもう一人、またサウルの長女メラブの五人の息子たちを引き渡しました¹³。ギブオン人たちは彼ら全員を大麦の収穫が始まる頃吊^つるして、その遺体をさらして腐るままにしました。

アヤの娘リツパは粗布を取って自分のために岩の上に広げた。彼女は、収穫の初めの頃から、天から雨が死者たちに降り注ぐ季節(秋の雨季)まで、昼は空の鳥が死者の上に止まるのを阻み、夜は野の獣が近づくのを防いだ(サム下 21:10)。

リツパが彼女の子どもたちの遺体を守って行ったことの報告がダビデに届くと、彼はペリシテ人たちがサウルとヨナタンを吊るしたバト・シャンの広場からヤベシュ・ギルアドの男たちが持ち去った彼らの骨を取り、吊るされた七人の骨を集め、彼らを一緒にベニヤミン族の地ツェラに、サウルの父キシユの墓に葬りました。神は宥められ、飢饉は止まりました(サム下 21:11-14)。

私たちが調べた他の女性たちと違って、リツパの言葉は一言も記されていません。その代わり彼女の行動それ自体が語っており、ダビデを促して彼の失敗を修復させ、サウルとヨナタンのふさわしい埋葬と儀礼を許可させたのです。このエピソードは語り手がダビデの生涯の偉大な政治的ドラマと、他では歌われていない、付随的な登場人物、そしてある時は彼の行動の犠牲者の個人的な物語を並べる手法のもう一つの例です。何年も前に私はリツパについて短い論文を書いて、以下のように結論づけました。

13 ヘブライ語本文は実際にはこの娘をメラブではなくミカルとして言及しているが、彼女は彼らをメホラ人バルジライの子アドリエルに産んだと言っている。彼はすでにサム上 18:19 でメラブと結婚したと言及されていた。ラビたちはこの明らかな誤りを、メラブは若くして死に、その息子たちは彼女の代わりにミカルによって育てられたのである — そして孤児を育てた者はその実の母と見なされるのだ! — と提案して解決した。

リツパは、平時であれ戦時であれ、自分の息子たちが国家の都合で彼らの最も良い時を迎える前に殺されるのを見ているすべての母である。彼女にとって残されているすべてのことは彼らの記憶の尊厳を保ち、証言をするために生き延び、世の支配者たちに説明せよと呼びかけ〔責任を問い続け〕ることです¹⁴。

結 論

サムエル記は生き生きと描かれ、広く、深い視野、文学的技巧を持ち、複雑な人間性の機微に触れている古代近東文学において稀な作品です。特に私たちが〔この講演で順番に〕出会ってきた女性たちは際立っており、脳裏に残るものです。ダビデ王の生涯において彼女たちが果たした役割のためだけでなく、自分自身の権利を持っている人たちとして、その物語は語られる価値があります。

14 *Bible Lives*, SCM Press, London 1992, page 11.